私の名は姫原ミコト。都内の学校に通う真面目で普通の女子学生だ。
だがそれは表の姿。我が姫原の一族は古から退魔を生業としており、
低級妖怪や高位魔族の討伐から、政府要人の護衛までを引き受けている名門だ。
私は今日も警察から連絡を受け、討伐対象になっている魔を斬り捨てた所だ。

【警官】「ミコトさん、今日もお勤めお疲れ様です」

【ミコト】「ありがとうございます。それではこれにて失礼いたします」

姫原家は魔から国を守っている名門であるため、警察とも協力関係にある。
私が帯刀していても逮捕されないし、私が関わる事件に関しても、
退魔行に影響を与える危険がある場合、適切にもみ消してくれている。
私は一族で最強の剣術の腕前を持ちながら、若さゆえに半人前扱いされていたが、
今では一族の長たるお婆様に認められ、一人前の扱いを受けるようになった。
ただ、認められるためには、かなりの辱めを受ける必要があったのだが。

私がお婆様から半人前扱いされていた理由とは、私が処女であり、魔物の陵辱に対して抵抗力が無いと思われていた事が原因だった。

そこでお婆様は、自分が惨めだと感じる相手に、処女をささげてみせよと、私に試練を与えた。

そして私は、お婆様を納得させるため、学校の男子トイレで、クソまみれの便器に突っ込まれていたトイレブラシを、子宮にまでねじ込んで処女を捨てたのだた。

それを手始めに、陵辱に耐えうる事を証明するため、
恥ずかしい恰好で外出し、浮浪者を逆レイプし、
中に射精させたりした。

またある日は、暴走族相手に
わざと敗北して、彼らに輪姦させ、
その様子を全て録画させ生放送さえた上で、
朝までその場に放置された事もあった。

さらには、子宮内部で魔物が繁殖した時を想定し、
子宮内部にナメクジを詰め込んだ状態で、
学校生活を送ったりもした。
子宮のナメクジに慣れて来た私は、
さらに嫌悪感の強い蟲である、
ゴキブリを子宮内で飼いながら、
学校生活を送ったりもした。

それらの行為を認められた私は、一人前の退魔師として大役を任せられる事になる。
ある邪教集団から呪いをかけられた要人を警護するため、私が身代わりとなり、触手の化け物に私を襲わせた。
触手は私の子宮まで入り込み卵を産み付けたが、私は何とかその触手を倒し、要人を守り切る事に成功した。
こうして私は一人前の退魔師として、あらゆる退魔行に駆り出される事となったのだった。

私に関わっている警察官は、それらの事件を知っている。
私が浮浪者を逆レイプした事も、私が暴走族に輪姦された事も、全て警察がもみ消した。
警察官は私の顔と体を舐めるように見つめ、ごくりと生唾を飲んだ。

【ミコト】「…何かよからぬ事でも考えていませんか？」
【警官】「い、いえっ！　めっそうもありませんっ！」

私は警官の視線に体の芯が熱くなるのを感じながら、警官と別れた。
以前に私が護衛した要人に呪いをかけた、邪教の教祖は倒れた。
しかし、邪教の信者は散り散りになり、悪事を働いている。
その魔物を全て倒しきるまでは、こんな日々が続くのだろう。

【ミコト】「ふぅ…体の火照りを抑えないと、眠れそうにないな…」

私は戦闘後の高揚感と、警官の視姦による興奮を鎮めるため、私はいつもの場所へと移動した。

私がとある廃墟へ向かうと、そこには以前私をレイプした暴走族が待ち構えていた。

【ミコト】「…相変わらず汚い所だな…」

【暴走族】「へへっ、よく来たな、ミコトちゃん。今日はセーラー服か、相変わらず美人だねぇ」

【暴走族】「大人しく俺達に犯されている限り、お前のレイプ動画は拡散しねえからよ」

【ミコト】「…わかっている…。約束は守ってもらうからな…」

なお、すでにレイプ動画は拡散されており、私が呼び出されレイプされるたびに、新たなレイプ動画を投稿されている事も知っている。

しかし、私は自分の発情を鎮めるため、あえて知らないふりをして、彼らの命令に従っている。

そして、警察にも彼らを逮捕しないようにお願いしているのだ。

今日もどんな酷い犯し方をしてくれるのか、どんな動画を撮影されてしまうのか。

私はこわばった表情とは裏腹に、心と体は彼らの酷いレイプを期待していた。

【暴走族】「そうだ、今日はいつもレイプさせてくれるミコトちゃんにプレゼントだ」
【ミコト】「…プレゼント？」
【暴走族】「俺達は暴走族だからな？　俺達に相応しい服に着替えて貰おうと思ってな」

そう言って、彼らはレースクイーンの衣装を私に手渡した。
受け取ったレースクイーンの衣装は、レオタードとジャケットとニーソックスという、オーソドックスな物だが、プレイ用なのか生地は薄かった。

【暴走族】「ほら、早く着替えろよ」
【ミコト】「わ、わかった…」
【暴走族】「へへっ…路上ストリップショーだな」

私は彼らに指示されるまま、制服を脱いでいく。
私がスカートとパンストを脱ぎ、下半身を彼らに晒すと、口笛と歓声が上がる。
私はじっくりと裸を彼らに見せつけながら、その卑猥なレースクイーンの衣装を身に着けていった。

【ミコト】「…き、着替えたぞ…」
【暴走族】「おお、予想通りめちゃくちゃに合ってるな、プレゼントしたかいがあったぜ」
【暴走族】「むしろ裸よりこっちの方がエロいんじゃねえか？」

暴走族達は、レースクイーン姿の私を見て興奮していた。
確かに裸よりエロいかもしれないと我ながら思う。

【暴走族】「さーて、まずは1回ずつ中出ししてやるからな？」
【暴走族】「ほら、いつも通りマンコ見せつけながらおねだりしろよ」
【暴走族】「今回もしっかりと、レイプ動画を撮影しといてやるからな」
【暴走族】「もし命令に従わなかったら動画がどうなるか、わかってるな？」

彼らは勃起したペニスを露出させ、そして次々にスマホを構え、それを私に向けた。
私は興奮を表情に出さないようにしつつ、命令通り両足を広げた。

私はその場で座り、両足を開き、レオタードをずらすと、
レオタードに引っ張られた割れ目が露わになった。

【暴走族】「へっ、もう簡単に開くようになったな」
【暴走族】「やりまくたから、もう顔に似合わない
ゆるゆるマンコだからなコイツ」
【暴走族】「ほら、いつも通りお願いしろよ？」
【ミコト】「…は、はいっ…ぼ、暴走族の皆さん、
今日もミコトのゆるゆるマンコを、
レイプして中出しして下さい…」

私は普通では考えられない、屈辱的な台詞を口にする。
しかし、そのセリフで暴走族が興奮しているのは事実だし、
そして私自身も、屈辱的に犯されるという事実に興奮が高まっていた。

【暴走族】「そんなエロいお願いされちゃ仕方ねぇな。希望通りレイプしてやるよ、へへっ」

【ミコト】「…は、はいっ…ありがとうございますっ…」

そうして、暴走族のヘッドに当たる男が、私の前に覆いかぶさり、逞しく勃起したペニスを見せつけた。すかり陵辱の虜になってしまった私は、そのペニスを見つめ、思わず興奮し、我慢しきれず愛液を垂れ流してしまう。

【暴走族】「見ろよあの目、ボスのチンポ、ガン見だぜ」

【暴走族】「愛液も垂れ流して、すっかり俺達の肉奴隷になったよな」

そんな屈辱的な言葉に興奮を高められながら、私はペニスがねじ込まれる瞬間を待った。

【暴走族】「オラ、行くぜ！しっかり締め付けろよ！」
《すにゅうううっ……！》

【ミコト】「…ひっ！　あああああっっ！」
【暴走族】「ちっ…おら、締め付けろよ！」

暴走族の逞しいペニスが、私の膣にねじ込まれた。
色々な相手に犯されすっかり開発された私の膣は、
すっかりゆるくなってしまっており、暴走族の太いペニスでさえ、
常に締め付けないと、ペニスの感触を味わう事が難しくなっている。

【暴走族】「へへっ…そうだ、そのまま締め付けておけよ！」

暴走族は満足そうに、激しく腰を振って私の子宮を突き上げて行く。

【ミコト】「ひっ！　あっ！　あっ！　あっ！」
《ぬぷんっ！》
【暴走族】「へっ…子宮の中に入ったか」
【ミコト】「は、はひっ…あっ…♥」
何度も犯された私は、膣だけでなく、子宮口もゆるくなっている。
何度か突き上げられれば、子宮口は簡単に開き、
男のペニスを子宮の中へと受け入れてしまう。
【暴走族】「子宮の中まで犯せる女なんてコイツくらいなもんだぜ」
【暴走族】「子宮を犯されてるのにあの顔、マジでエロいよなこいつ」
私は子宮を犯される快楽に、だらしない表情と声を晒していた。
RAPE FREE
Public Lavatory
SEX SLAVE
Please Rape Me

【暴走族】「オラ、そろそろ出すぞ！しっかり締め付けろ！」
【ミコト】「あっ…♥　は、はいっ…♥」
《びゅるっ…！びゅるるるる！！》
【ミコト】「あっ…♥　し、染み込んで来るっ♥」
暴走族は私の子宮の中にペニスをねじこんだまま射精した。
私は暴走族の命令を守ってしっかりと締め付けて、
精液を一滴もあふれさせないようにする。
すぐに精液は子宮を満たし、卵管の奥に流れ込んでいく。
【暴走族】「へへっ…中出しされてイッてるぜあいつ」
暴走族の指摘通り、私は精液が流れ込む快楽で絶頂を迎えていた。
SEX SLAVE
Please Rape Me

【暴走族】「ふぅ、スッキリした…」
【ミコト】「はぁっ…♥ はぁっ…♥」
暴走族のヘッドは、まるで排泄でも済ませたかのような
セリフを吐き、私の子宮からペニスを引き抜いた。
絶頂の余韻で膣の締め付けが一瞬ゆるくなり、
精液があふれ出しそうになるが、腰を持ち上げた体勢であるため、
かろうじてあふれ出す前に膣を締め付け、とどめる事が出来た。
【暴走族】「よーし交代だ。お前ら、ヤッてもいいぞ！」
【暴走族】「さっすがヘッド！ 話がわかる～！」
ヘッドがそう言って私から離れると、次の男が私に近づき、
絶頂の余韻もまだ収まらない私のオマンコに、ペニスをねじ込んでいった。
SEX SLAVE
Please Rape Me

それから私は代わる代わる、暴走族達にレイプされ、中出しされた。
私は暴走族に犯されつつ、時には暴走族の上に乗って、自ら腰を振った。
【暴走族】「へへっ、ほら、しっかり締め付けるよ、このユルユル女っ！」
【ミコト】「は、はいっ…ひっ♥」
この体位は子宮にまで簡単にペニスが届いて、とても気持ちがいい。
子宮を突き上げられるたび、子宮の精液があふれ出して、
びちゃびちゃと音を立てて飛び散っていく。
私はレイプされているという建前も、撮影されている事も忘れ、
快楽をむさぼるように、ひたすら腰を振った。

【暴走族】「ほら、出すぞっ！ しっかり子宮で受け止めろよ！」
【ミコト】「ひっ！ あぁぁぁぁぁぁっっっっ♥」
《びゅるっ…びゅるるるるっっっっ！！！》
私は男が射精するタイミングで、膣を締め付けて精液を搾り取る。
何度犯されても、子宮の中に精液を注ぎ込まれるのはとても気持ちいい。
私はその精液の生温かさを子宮と卵管で受け止めながら、
何度目になるか分からない絶頂を迎えて、体を震わせた。
そうして何時間も犯され続け、やっと全員が飽きた頃、
私の輪姦陵辱は終了した。

私が呼吸を整えつつ、半開きになった子宮口と膣口から、中に出された精液を垂れ流し、地面に水たまりを作っている様子を、暴走族達がタバコをふかしながら眺めている。

【暴走族】「へへっ、今日も出した出した。ありがとよミコトちゃん」

【暴走族】「それにしても、コイツが美人だから出るものの、このユルユルマンコ、なんとかならねぇもんかな。これじゃオナホの方がマシだぜ？」

【暴走族】「どうせゆるゆるなら、オナホぶち込んで使った方がいいんじゃね？」

【暴走族】「そうだな、オナホならコイツがどんだけユルユルになろうが関係無いからな」

暴走族はにや付いた顔で、私の所に歩み寄ってきた。

次は一体何をやらされるのか、私はドキドキしながら、

彼らの次の言葉を待っていた。

【暴走族】「じゃ、もっとガバガバにしてやるからこっちに尻向ける。ありがたく思えよ、ミコトちゃん」
【ミコト】「うぐっ…は、はいっ…」
【暴走族】「よーし、新入り、お前がここに腕を突っ込め」
【暴走族】「え、嫌ですよヘッド！　皆に中出しされた汚いマンコに手を突っ込むなんて…」
【暴走族】「つべこべ言うな。ちゃんと子宮まで腕を突っ込んで奥までほじくるんだぞ？」
【暴走族】「うえっ…汁まみれだ…汚ねえなぁ…」
ヘッドにそう命令された下っ端の暴走族は、本当に嫌そうな表情を浮かべ、私のオマンコに手を近づける。大事な所を汚いと言われ屈辱的であるにも関わらず、私はドキドキして愛液を垂れ流していた。